

ねらい

言語を構成する音、単語、文法、意味などの諸側面にわたって言語学の分野が設けられています。言語の歴史や変異、言語を用いる状況や社会などを対象とする分野もあります。

キーワード 音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論

音声学・音韻論

人

間の言語は音を媒介として意味を伝達します。この音を対象とする分野が音声学 (phonetics) と音韻論 (phonology) です。音声学では、世界の諸言語で使われるすべての音声を対象として、その特性が分析されます。音声そのものはラングの要素ではないので、厳密に言えば音声学は言語学に属する分野ではありません。しかし、ラングの要素である音素は音声として実現されるのですから、言語学と音声学は密接に関連しています。

発音に関わる器官をどのように使って個々の音声が作り出されるのかという観点から音声の特徴を記述する分野を調音音声学 (articulatory phonetics) と言います。言語学ではこの調音音声学の研究成果が最も普通にご利用されます。空気中を伝わる物理的な波動として、特別な機械などを使用して音声の特性を分析する分野が音響音声学 (acoustic phonetics) です。最近ではコンピュータを用いて音声を分析することが比較的容易にできるようになりました。どちらかと言えば工学系の分野であり、機械による音声

の認識や産出などに成果が利用されています。人間による音声の認識がどのような過程で実行されているのかを対象とする分野が聴覚音声学 (auditory phonetics) です。鼓膜や聴覚神経さらには脳などの器官が音声の認識においてどのような役割を果たすのかが問題となりますから、医学・生理学系の分野で研究が進められています。

記号のシニフィアンを構成する要素としての音素を対象とする分野が音韻論です。音韻論ではまず、個別言語で使用される音声がどのような音素に類別されるのかを客観的に決定する手続きを設定しなければなりません。こうして音素が抽出されたあとでは、音素がつくる体系を考慮に入れながら、それぞれの音素がもつ特徴が明らかにされます。シニフィアンは複数の音素が並んだものですから、音素がどのような規則に従って並ぶのか、つまり音素の構造も解明しなければなりません。音韻論では、音素だけでなくシニフィアンとしての音素の並びに与えられるアクセント(高さや強さ)や声調なども対象となりますし、文全体を発音するときに区別されるイントネーションの分析も行われます。

形態論

単 語の構造を対象とする分野が形態論 (morphology) です。言語学では、単語よりも下に位置する最小の記号として形態素 (morpheme) という単位が設定されています。形態論では、まず形態素とはどのようなものかが定義され、形態素を抽出するための客観的な手続きが明らかにされます。こうして抽出された形態素は、その働きによって分類されます。単語は形態素によって構成されますから、単語の要素としての形態素がどのような規則に従って並んでいるのかということ、つまり単語の構造が問題となります。複数の形態素によって構成されている単語については、形態素の種類とその並び方をもとにして、品詞とは異なった観点からその分類を行うことができます。

単語や形態素の分類は、これらの単位が表す意味を分析する際だけでなく、文の構造を記述し説明するためにも必要な作業です。形態論ではまた、新しい単語がどのような方法でつくられるのかという語形成 (word forma-

tion)の問題も対象となります。

統語論

単

語や形態素がどのような規則に従って並んでいるのか、つまり文がどのような構造をもっているのかという問題を対象とする分野が統語論 (syntax) です。統辞論あるいは構文論などと呼ばれることもあります。統語論では、まず個別言語の文がもつ構造をできるだけわかりやすい形で表し、このようにして表された構造を決定する一般的な規則を記述します。

個別言語の文がもつ構造とその構造を決定する規則が適切に記述されたあとには、そのような規則がどのような原理に基づくのかを解明することが必要になります。この際には、できるだけ多くの言語を材料にすることが望ましいのですが、1つの言語を対象として原理を抽出し、その原理が他の諸言語にも適用できるかどうかを検証するという方法もあります。

意味論

単

語・形態素と文が表す意味を対象とする分野が意味論 (semantics) です。意味論では、まず意味とは何かという定義が行われます。こうして定義された意味の性質を、単語・形態素と文のそれぞれについて分析していくのが意味論の目標です。単語・形態素に関しては、これらの単位の意味をどのような手続きで決定するのか、決定された意味がどのような特徴をもち、全体として体系をつくっているそれぞれの意味の間にはどのような関係があるのかという問題が主として考察されます。文の意味については、文を構成する単語や形態素の意味がどのような手続きで組み合わされるのか、組み合わされた意味を最終的にどのような形で表せばよいのかといった問題が取り扱われます。

語用論

文

が使われる状況や場面が単語・形態素や文の形式や意味とどのように関係してくるのかを対象とする分野が**語用論** (pragmatics) です。**実用論**と呼ばれることもあります。状況を構成する要素とは何か、状況に応じてどのような形式が選択されるのか、意味を理解する場合に状況がどのような形で参照されるのかといった問題が語用論では考察されます。文が本来表すはずの意味とは異なった意味で理解される場合に、聞き手がどのような過程をたどって意味を導くのかということも、語用論の重要な課題の1つです。

歴史言語学

言

語の変化を対象とする分野が**歴史言語学** (historical linguistics) です。通時態を対象とするので**通時言語学** (diachronic linguistics) とも呼ばれます。個別言語の音素、語形、意味、文法などの変化が対象となるだけでなく、共通の祖先をもつ諸言語を比較することで、祖先の言語がどのような性質をもっていたのかを推測することも行われます。また、そもそも言語がどうして変化するのかを解明することも歴史言語学の課題です。

言語地理学

言

語の地理的変異をもとに、言語を構成する要素の歴史的变化を推測することを目的とするのが**言語地理学** (geographical linguistics) です。この分野では、単語の語形・意味や文法などが、地域によってどのように異なっているのかを表した**言語地図** (linguistic atlas) を作成し、言語地図を分析することによって語形などの変化を推測します。古い時代の文献が残っていない方言の歴史を明らかにしたい場合には、この言語地理学的方法が唯一の手段になります。